

2025 年 10 月 5 日 世界聖餐日（聖霊降臨節 第 18 主日）礼拝

メッセージ「人の願いと神の願い」

牛田匡牧師

聖書 マタイによる福音書 19 章 16-30 節

朝晩は涼しくなり、ずっと残暑と言いますか、酷暑が続いていましたが、いつの間にか秋がやってきました。とはいえ、もう 10 月です。日中に 30 度前後になるのは、やはり季節外れの暑さでしょうか。10 月の第 1 週は「世界聖餐日」です。カトリックや聖公会などでは、毎週の礼拝で聖餐式が行われていますが、プロテスタントの教会も含めて、この日は世界中の教会で聖餐式を行いましょうとされています。この「世界聖餐日」は、そもそも、世界中が分断され、対立し合った 20 世紀の二度の世界大戦の経験から始まったそうで、「聖餐によって、世界中の教会が一つになること」、平和と一致を祈り願う日として定められたのだそうです。

昨日は、自民党の総裁選が行われ、高市早苗さんが新しい総裁に選出されました。初の女性総裁ということでしたが、女性か男性かという以前に、彼女の極端な極右思想と激しい排外主義が、今後どのように変わっていくのかが、非常に気懸りです。アメリカのトランプ大統領を始め、多くの国々が極右化していく中、日本もその道に追随していく……。そのような世界の流れの中で、今日は平和と一致を願う世界聖餐日として、聖書の言葉に耳を傾けたいと思います。

今回のお話は、一人の青年がイエス様の所にやって来て質問をした、というお話でした。この青年は「たくさんの財産を持っていた」（22）、「金持ち」（23）だったとありますから、きっと身に着けている衣服も、イエス様やその周りにいたお弟子さんたち、集まっていた多くの貧しい人たちとは、全然違っていただろうのではないかと思います。そのような彼が、イエス様に尋ねました。「先生、永遠の命を得るには、どんな善いことをすればよいのでしょうか」（16）。これはいわゆる「礼儀正しい」質問の仕方でしょう。ですが、イエス様の返答は素気のないものでした。金持ちに対する嫌味もあったのかもしれませんが。「なぜ、善いことについて、私に尋ねるのか。善い方はおひとりである。命に入りたいと思うなら、戒めを守りなさい」（17）。「何

故、わざわざ私に尋ねるのか。あなたは元々分かっているのではないか」とでも言いたげです。そして続く「どの戒めですか」という彼の問いに対しても、「殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、父と母を敬え、また、隣人を自分のように愛しなさい」(18-19)と素気なく答えられました。

これらの掟は、いわゆる「モーセの十戒」に代表される律法の中の掟です(申命記 5、出エジプト 20)。古代イスラエルの人たちにとって、神様から与えられた律法を守ることが、自分たちのアイデンティティでした。「私の声に従い、私があなたがたに命じることをすべて行えば、あなたがたは私の民となり、私はあなたがたの神となる」(エレミヤ 11:4)という「ヘブライ語聖書」の言葉に表されているように、律法を守ることによって自分たちは神の民として、神から選ばれ、守られ祝福されると考えていたわけです。そしてその律法を代表する掟が、モーセの十戒であったり、「隣人を自分のように愛しなさい」(レビ 19:18)という掟でした。

しかし、この青年は悪びれることなく即答しました。「そういうことはみな守ってきました。まだ何か欠けているでしょうか」(20)……。さて、私たちだったらどうでしょうか。イエス様から「殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、父と母を敬え、また、隣人を自分のように愛しなさい」(18-19)と言われた時、この青年のように、「もちろん、それら全部、忠実に守って来ています。まだ他に何が必要か教えてください」と言えるでしょうか。むしろ、イエス様が「善きサマリア人のたとえ」を話されるきっかけとなった、ある律法の専門家のように「私の隣人とは誰ですか」という問いかけを、胸に抱く人もおられるかもしれません。しかし、この青年はそうではありませんでした。

だからこそイエス様は彼の質問に対して、「もし完全になりたいのなら、行って持ち物売り、貧しい人々に与えなさい。そうすれば、天に宝を積むことになる。それから、私に従いなさい」(22)と答え、この青年はその返答に悩みつつ、悲しみながら立ち去っていきました。なぜなら、彼は沢山の財産を持っていたからでした(23)。彼はたくさんのお金に執着していたから、それを手放すことが怖くて出来なかったのでしょうか。その後続く23節以降のお話や、27節の「私たちは何もかも捨てて、あなたに従って参りました」というペトロの言葉などを見ると、彼は

「お金を喜捨する」「財産を手放す」ことが出来なかった青年というように読んでしまいそうになります。確かに、「あなたがたは、神と富とに仕えることはできない」(マタイ 6:24)というイエス様の言葉もありますから、そのように読めなくもありません。

ですが、私はこの青年に欠けていたのは、「お金を手放すこと」ではなく、むしろ「誰を隣人として見ているか」という視点だったのではないかと思います。それこそ当時のユダヤ社会は、現代よりもさらに貧富の格差が激しく、貧しい者はさらに貧しく、富める者はさらに富んでいくような社会でした。借金の形に先祖伝来の畑を失って小作農になったり、日雇い労働者になったりする人たちが多くいました。一方で、金持ちはその金を使って、さらに土地を買い占めたりして、ますます金儲けをしていくという調子だったわけです。ですから、この金持ちの青年にとっては、イエス様の周りにいた「貧しい人々」(21)というのは、自分の「隣人」としては全く映っていなかった。それこそ畑や船を貸したりする相手、仕事を与えて賃金を与えてやったりする相手、搾取の対象としてしか映っていなかったのではないのでしょうか。

また「持ち物を売り、貧しい人々に与えなさい」(21)と訳されている言葉の元々の意味は、「抱え込み、握りしめている物を露店に並べて、貧しい人たちと交換し合い、必要に応じて提供しなさい」(本田哲郎訳)です。決して「持ち物全てを売り払って、裸一貫になって従いなさい」という意味ではありません。ですから、隣人とは誰かが見えなくなっていること、搾取して富を得ていること、得たものを握りしめて分かち合おうとしていないこと、それらこそがこの青年に欠けていたことであり、「隣人を自分自身のように大切に」できていないことだったわけです。

後半の 23 節以降は、一転してペトロら弟子たちについて、あなたたちは「何もかも捨てて、立派にイエス様に従って来ているから、これから先、新しい世界では百倍の報いを受けて、永遠の命を受け継ぎ、きちんと報われます」と言われているかのように読んでしまいそうですが、こちら「捨てる」ことが要点というわけではなさそうです。そもそも 27 節にある「捨てる」という言葉は、「置く、そのままにしておく」という意味の言葉です。ガリラヤ湖の湖畔に、船も網も置いて、その場に残し

イエス様に従ったペトロたちです(マタイ 4)。捨てたり、売り払ったりしたわけではないので、戻ろうと思えば戻れる。だけど、イエス様の後に従うことを優先したということです。

さらに、そのようにしてイエス様と行動を共にしていた弟子たちですら、「あなたたちにはからし種一粒ほども、信仰がない」、信頼をもって行動を起こしていない、と言われていました(マタイ 17:19-20)。つまり、持ち物を置いてイエス様を優先して付き従ったと言っても、単にイエス様について来ただけなら意味がないよ。誰が、自分の隣人なのか、何を自分はすべきなのか。それらを考えて、そして行動しなさい。そうすることによって、「永遠の命」が与えられていること、「真実の命」が「今ここ(新しい世界)」にあることに気付くでしょう。そのようにイエス様から、言われているのだと思います。

人の願いは、日々の糧を得ること、健康が守られること、自分の生活が豊かになることや永遠の命が得られることであったりします。だからこそ、他者から攻撃されないかどうかを恐れて、攻撃される前に排斥したり、先制攻撃をしようとしたりもします。一方、神様の願いは、イエス様がその言葉と振る舞いで示されたように、全ての人々が共に大切にし合う世界が実現することです。ますます視野が狭くなり、自分の周りしか見えなくなり、心にもゆとりがなくなりつつある現代において、誰かの足を踏みつけながら、「私にまだ何か欠けているでしょうか」(20)と問うようなことがないように、隣人の存在に気付けるようでありたいと願います。そのように、心と目が開かれながら、私たちは今日もここから導かれていきます。